

# 浜名鈴木刃傷一件

中田顕蔵謄写

堀井雅弘校訂

## 凡例

一、鈴木浜名刃傷一件は、小浜藩士加藤祖太夫が書き留めたと推測される明和五年（一七六八）六月の小浜城下での刃傷一件（五日に同藩士の子浜名多賀丞・同藩士鈴木吉之助が口論・刃傷、翌六日に多賀丞が切腹）の記録である。

一、本書は、京都大学文学研究科図書館で所蔵されている「雲浜厳秘録 附浜名鈴木刃傷一件」を底本とした。同書は、大正五年（一九一六）

一月に中田顕蔵が「若狭事歴類合」から謄写した写本である。

一、文字は、一部をのぞき、通用の文字に改めた。

一、校訂にあたって、本文中に読点と並列点を加えた。

一、校訂者の注記は、（ ）で示した。

一、本書の成立や刃傷一件の概要については、本紀要収載の「部屋住みの武士」<sup>1</sup>「浜名多賀丞の切腹」を参照されたい。

## （表紙）

雲浜厳秘録附浜名鈴木刃傷一件

## （扉）

雲浜厳秘録

附浜名鈴木刃傷一件

## （扉）

浜名鈴木刃傷一件

## （本文）

浜名多賀丞鈴木吉之助刃傷一件記

一、明和五<sup>1</sup>戊<sup>7</sup>子<sup>6</sup>年六月五日夕飯後、中根伝兵衛弟半市方江話に参り咄居候処、其夕方より夜分二掛、黒田唯右衛門火業殿<sup>（酒井屋）</sup>御覽被遊二付、諸家中何も見物に罷越候、依之多賀丞義も見物に罷越候付、彼方暇乞いたし罷帰候節、中安治左衛門門前二鈴木吉之助・坂道之進兩人立咄致居候処江通合、見請候処、吉之助方無刀にて門前二居候付、多賀丞申候ハ、武士之無刀二而門前江罷出候義、如何に可有之哉之旨為異見申候処、吉之助申候ハ、貴様などの様成未熟の者に脇差ハ入不申、無刀二而もくるしく無之旨申聞候付、左候ハ、自分をあな取被申候やと申候得者、吉之助又申候者、中々貴様杯に被切候拙者にてハ無之候、さられ候ハ、切見申候様申候二付、左候ハ、切可申と申手もなく、一太刀に抜打二切掛申候処、問合も少々置候故か、切先はつれに薄手をおハせ、向ふより少し寄りか、り候を又踏込、諸手打に肩先より乳の辺迄切込候得者、其俣たをれ、吉之助事切れ申候付、刀を治め、道之進同道二而自分門前迄罷帰、扱多賀丞道之助江<sup>進</sup>、是迄者段々御心安被

成下忝存候段一礼伸、宅江帰候事、吉之助 道之進同年十六歳

一、多賀丞罷帰候処、源吾義者西津口夕番ニ而留守之処、折節源吾妻はた細工ニ取掛り罷在候処江、多賀丞ハ、袴着致し、右はた場へ罷越、母江申候者、唯今私不得止事鈴木吉之助方と致口論及刃傷候、依之唯今自殺仕候、誠ニ無余義事ニ付右之仕合ニ而御坐候得共、御両親様江対し甚不孝之段申上様も無御坐候、此段幾重ニも御高免被下度奉存と申、既ニ自殺可致所を、母申候者、源吾殿ニも御番ニテ御留守之事ニ候得者、早速右之義申遣、御帰之上ニ而如何様共御差図可有之間、暫之内相待候様ニと申、早速御番所江多賀丞義急病之旨申遣、扱母多賀丞江申候者、其方義、及刃傷候次第一通届帰候哉と相尋候所、此義ハ心付不申、不調法之段申候、先進所と申、回家之義故浜名平八方江、多賀丞急病ニ而御坐候間、源吾義ハ夕番ニ而御坐候間、御同番所之義故、乍御苦勞御出番被下、源吾ハ御帰シ被下候様ニと申遣、平八義右之支度ニ取懸り、倅紋左衛門早速駆付候処、かくくの次第二候、多賀丞唯今自殺可致段申候得共、源吾儀夕番故、先帰候迄相待候様ニと申付置候、届致し帰候哉と相尋候処、其義者心付不申、夫形（意）ニ罷帰候段申候間、宜届呉候様ニと母申候ゆへ、紋左衛門委細致承知、先廻して江坂作左衛門殿父子可被仰進候、是上ニ而御相談申、先江届候様可然申候内、作左衛門父子被参候付、右之義を申、紋左衛門義ハ、少も早平八を代り合ニ遣可申と為知旁帰候而、早速平八出番致し、源吾義御番所引取申候事

一、夫より相談之上、中安治左衛門方江先届可申遣と、近所名和庄太夫倅富右衛門方ハ多賀丞平日心安故、右仁相頼申遣候ハ、倅多賀丞義、

先刻吉之助殿と致口論及刃傷候哉ニ而、自殺可致申候得共、未吉之助殿御様子も承知不致候得者、先指留罷在候、吉之助殿御様子如何御坐候哉致承知度、御届旁申遣候段相頼申遣、富右衛門即刻被参呉、親類方ニ得御意度段申入候処、可児源左衛門方被出候付、右之口上申入候処、治左衛門方答ニ者、従是も可得御意と存候所ニ而候、吉之助義未養生最中ニ而御坐候間、御切腹之義者御差留可被下候、治左衛門可得御意候得共、疵も深く介抱致罷在候間、此段宜頼入候との返事也

但、多賀丞申候ハ即死と之哉申候処、養生最中と被申越候義不都合之様ニ候得共、儉使無之内ニ内江引入被申候ニ付、養生最中と被申越候物と被存候、内分承合候処、即死ニ者紛無之趣ニ候

一、組頭鳥居彦兵衛殿江、者頭高田五郎次郎方を以、口上ニ而申達候趣左之通

一、私倅多賀丞義、中根半市方江罷越、帰路、中安治左衛門方門前ニ而鈴木吉之助方と及口論ニ、不得止事切付、罷帰申候間、切腹可仕と申候得共、吉之助方容体之程も難計、名和留右衛門方を以承合候処、養生之内と有之義故、切腹之義指留置申候、此段追而御書付可申達候得共、先是等之趣御聞置被下度旨申達候、以上

六月五日 浜名源吾

高田五郎次郎殿

一、暮六時分、五郎次郎方被帰、彦兵衛殿右之次第被承届候哉、案内有之

一、七半時比、坂道之進方江其時之始末相尋候処、多賀丞申口ニ同断故、猶心得申置候事

一、先口上二而組頭衆江一通り申達候段、名和留右衛門方相頼候而、中安治右衛門方江懸合申置

一、七半時過、本多孫左衛門方被參、吉之助事切レ候付、親類方之内參被見可然哉と内々被知候

一、右同刻、加藤祖大夫、治左衛門方江罷越、親類中江逢申度申入、吉之助容体相尋申候得者、鶴田彦之丞・可児源左衛門被罷出、被申候ハ、吉之助只今事切レ、自是可得御意を存候処、預御尋忝存と由二付、承届罷帰ル

一、中安治左衛門方江、組頭衆江之達書祖大夫持參致し為見申候処、暫熟読之上二而可被返旨被申聞候付罷帰、其後本多孫左衛門方持參候而、何之存寄も無之候得共、右之内二治左衛門留守と有之候得共、治左衛門義ハ在宿致罷在候様被申聞候

但、治左衛門方好二而、最初口上二而組頭衆江申達候趣を書付遣  
一、右之節、治左衛門方達書も孫左衛門方持參二付、何も一覽之上可返とて、其後竹岡常右衛門致持參、孫左衛門方江相渡

一、組頭衆江達候書付之趣左之通

一、私忝多賀丞義、今夕鈴木吉之助と及口論二候上、切付申候而罷帰、切腹可仕旨申候処、親類共先指留、私夕番二付御番所江申越候故、引取候上忝江様子相尋候処、中安治左衛門門外二吉之助・坂道之進兩人遊居候処忝通合、吉之助江忝申候者、遊被居候体不宜候旨異見を申候処、御手前杯未熟之者二心遣ハ無之哉申候故、左候ハ、自分を見下ケ候而被申哉と申候得者、貴様杯二被切候自分に而ハ無之候哉申候故、不得止事切倒申候段申候、当年忝十六歳、年も不參候付、行届不

申、夫形二罷帰、切腹可仕与申候付、先差留、近所旁名和留右衛門方を相頼、治左衛門方江相届、吉之助容体被承合候処、唯今致養生罷在候段、是よりも可申入所二候哉、一類中被申聞候段、留右衛門罷帰申聞候、依之吉之助養生之程難計、切腹も難申付為指扣置申候、右之趣二而及延引申候付、一通御届申上置候、不慮之義二付及騒動、於私恐入奉存候、此段鳥居彦兵衛殿迄宜御申達可被下候、以上

六月五日

浜名源吾

高田五郎次郎殿

但、達書二無刀と書出候事ハ、先江対遠慮も有之二付、何も及相談、右之通相認候、乍去御尋も有之候上ハ実を可申と申合置候処、則御尋二付、有躰二申達候、尤右者孫左衛門方迄常右衛門内々二而、無刀之儀者不相認候、治左衛門殿江も可然様御取斗被申置可被下候段申置、追而多賀丞御吟味之節、当人有躰申達候事

一、内々二而彦兵衛殿江相伺候趣書付左之通

覚

一、吉之助養生不相叶、暮前相果候様致承知候

一、右二付、倅江切腹可申付可然哉之事

一、御上より御吟味も御坐候義二候哉之事

一、右御吟味も相濟候上、切腹為致度可伺可然哉之事

一、儉使被差出被下度申達候筋二御坐候哉之事

一、清嚴寺切腹場所二仕度事

一、右書付并口上頭書共、五郎次郎方江、夜九前時、常右衛門方杯參相頼、其節指扣之義も相伺給候様二相頼、即刻達被呉候処、御承知被成

候、何事も追而右可被仰談由御挨拶二候段、五郎次郎被參候而被申聞候事

但、此時彦兵衛殿江内々可尋候事、前二記有之事

一、翌六日四時、高田五郎次郎方・大目付吉田仙右衛門被罷越、五郎次郎被申候者、昨日吉之助方口論之義、多賀允江直二尚又相尋候様二と彦兵衛殿御談二付罷越候、依之多賀允殿被罷出、口論之次第有体二被申聞候様二申候付、則多賀允罷出、源吾も罷出ル

一、五郎次郎方被申候ハ、吉之助方被切候節、刀ハ鞘二納候而被歸候哉、又者其俣二而被罷歸候哉と被相尋候処、多賀丞申候ハ、刀ハ其俣鞘二納候而被歸候段、左候ハ、承届候とて、五郎次郎・仙右衛門方被罷歸候事

一、六日七時前、五郎次郎方被罷越、源吾江被申渡候者、其方俣多賀丞儀、吉之助と致口論及刃傷二候、依之御定法之通切腹被仰付候、介錯之義御上より可被仰付候得共、多賀丞義御上江抱候義二而ハ無之候付、何レ成共親類之内相頼候様二と被仰出候段被申聞、源吾方難有段御請申候事

但、興津善藏別段二申候者、多賀丞義、右一件二而結構被仰付、親類共一統二難有仕合奉存候、此段も御席之節江被仰達被下候様申候事

一、右二付常右衛門申候ハ、無程御使可被差出と存候段申候処、則五郎次郎方江被仰付候段被申候故、左候ハ、暫手間取可申候間、自是御案内可申旨及挨拶引取申候事、但最初懸合二ハ、大目付吉田仙右衛門方被出候処、此度檢使之節、樋口兵藏方被出候事、不審

一、五郎次郎方江案内、殊外手間取、暮合二も相成候処、五郎次郎方ハ樋口兵藏紙面為持差越候、右手紙二ハ、吉田仙右衛門罷越候筈之処、私罷出候間、御越之節被仰知度旨之手紙也

一、兼而西津清嚴寺切腹場二相頼申置候処、清嚴寺申候ハ、多賀丞殿旦那寺二御坐候ハ、兎も角も致可申候得共、旦那二も無御坐、其上第一上皇帝<sup>御</sup>旨も有之候得ハ、寺職二も相成候間、外御頼可被下由、左候ハ、御上ハ被仰付候ハ、如何可有之哉と申候得ハ、御上二被仰付候ハ、いか様共可仕段申候付、内分彦兵衛殿迄申遣候ハ、清嚴寺切腹場所二仕度間、何卒可被成候者、御上より清嚴寺江切腹場所二被仰付候段御声被懸度段申達候処、六日七半時過二相成、清嚴寺切腹場所二御上ハ被仰付候義ハ難相成、自分相對二可致、是も不相成候ハ、宅二而切腹可被致、手狭二有之候ハ、庭二而も不苦候間、何方二而も勝手次第二仕候様二御申談二付、夫ハ俄二旦那寺空印寺江相頼申候処、不相成哉、其外長源寺・源心寺江も相頼候へとも、旦那之義二而御坐候者、承知可致候へ共、外旦那之義御坐候間、難相成哉、何も段々断二付、不得止事、乍手狭源吾宅二而切腹二相極、右切腹之支度者前夜致出来居候得共、右之懸合二而手間取、段々延引相成候事

一、多賀丞義ハ、切腹致候前迄、縁側二出、何茂と咄申候処、少しも平日二不相替、何も打寄殺生咄杯致、夜食も平日之通快給居候処、段々刻限延引相成候付、何も相談之上、弥宅ニテ切腹為致可申と相定、夫ハ五郎次郎方江案内申遣、右用意取懸申候事

一、夫より多賀丞二申候ハ、切腹被仰付、押付檢使被參候付、支度可致旨申聞候得者、左候ハ、とて、夫より小便二參候

右小便致候旨申候付、多門付添罷越候、平日ニ少シも不違状小便致申候

夫々着服相改、直二切腹場江罷出可申躰致候付、未俛使見二不申候間、今少たはこ二而も給候へと申候得ハ、左候ハ、とて、茶・多葉粉給、扇子を持て腹切候真似杯いたし、未俛使見へ不申哉と切腹を急キ申候様子二付、俛使見へ候て案内可致間、随分と心を静め可申と何茂申候得者、若年故切腹之致様も源之進教二而、又々扇子を以ひた物切腹之稽古致居候

一、俛使として、六日夜五半時比、高田五郎次郎・大目付樋口兵藏被参候旨、何茂多賀丞江申候ハ、俛使被参候付、親類中挨拶之内多葉粉二而も給、心静二致し切腹可致と申候得者、又々煙草三服給、右煙草入・きせる・鼻紙入等伝六江相渡、何茂江向ひ申候ハ、唯今迄何も様段々御世話被成下忝存候、此度尚更御世話二可相成と存候、何分宜頼候段申候而切腹場所江罷出、俛使二向ひ、何茂様御苦勞存候段申候処、少もわろひれず、何も驚入申候義二御坐候、右切腹場畳之上居申候得ハ、浜名紋左衛門腹切刀持出ル、尤介錯柏屋富之丞罷出ル、夫より両はたをぬき、心静に三方を引寄戴候処を、直二首を打落す、右を田中太右衛門取上ケ、俛使江向及挨拶候処、見事二有之由被申聞、十六歳二而ハ見事なる最期也

一、俛使五郎次郎方江、常右衛門申候ハ、時節柄之義、殊更若年故、諸事省略仕不参届段申聞候処、諸事参届候段五郎次郎方被申聞、兩人共に引取候事

一、介錯之義、最初紋左衛門方江相頼申候処、私義部屋住之義如何と存候間、外江相頼呉様被申二付、富之丞方相頼申候  
一、六日昼、五郎次郎方・仙右衛門方、右口論之刻之義一通承二被参候節、

多賀丞鏡を出し、貌を得と見申候而、夫々坐敷江罷出申、平日殺生のミニカ、り、外友達之様二髪・月代・身成二も一向不構処、右鏡を見申候ハ、顔色二而も替り候やと存見申候や、右之通不審二存候事

一、切腹致候前迄、縁二而涼居、着服等着替、たはこ給、座敷江出候節、何茂に向ひ一礼述候事、平日一向右之口上類不調法之処、是又何茂驚入候、其外終始年比二ハ行届候事故、右之一件後世二残し可置ため、相認置候事

一、切腹場所之次第、畳二畳新二申付、并へ敷、其上江ふとん代り白木綿ひとへ敷、畳之辺り二く、り、白張之屏風不有合、常之屏風引廻シ建ル、介錯邪魔二不相成様、切腹場江銚子・盃差出、介錯人江盃事之義ハ致省略、右之類、伊藤右近兵衛方江諸事相尋、取計

右諸事省略之義、俛使江も申達置候事

一、多賀丞白帷子二ツ麻上下着用、介錯人ハ染帷子麻上下着用、此夜ハ親類中何も麻上下着用、源吾妻・娘共ハ江坂作左衛門方江内々遣シ置  
明和五戊子六月五日<sup>（マ）</sup>

此書ハ加藤祖大夫方書留之哉、天保三丙午秋、以矢部氏藏書写畢

(別書)

別書抄

介錯之法

一、小サ刀ニテ介錯スル事  
一、上下又ハ羽織袴、時宜ニヨル也、無紋二不及  
一、鞆ハ以前ニハスシ置也

一、打様、片膝ツキ、見事ニ打ヘシ

一、切腹人ト盃事スル事、介抱人ノ世話ニテスル事、此方ヨリ吞テ差也

一、儉使ヨリ御命シトアレハ首ヲ取テ見セル、左モ無ハ見スルニ不及、打落シタルカ慥事也、首化粧ナト云事、当流ニ不用

一、始終、切腹人ニ附添セ、話スヘシ、麻上下少シカラケ、脇指サシ、介錯ノ刀持出ル也、死席ニ着坐、盃事アリ、自分吞テ指ヘシ、返盃アリ、夫ヨリ、別人短刀持出ル、切腹人肉袒スル時、介錯刀鞘ヲハツス、但、其前ニ自分ノ脇差脱ヘシ、打様ハ、右ノ膝ヲ打敷、左ノ膝ヲ立テ、切時ハ立也、扱、首落テ后、刀ヲ鞘ニ治メ、脇差ヲサシ、首ヲ持出、儉使エ見セル、其後、儉使エ御苦勞ト挨拶スル也、首ノ持様ハ、右ニタブサヲ持、左手ヲ下ニ添持也

一、死席ハ、黒ヘリノ畳式畳、其上ニ白木綿ノ七ノ蒲団、其上ニ毛セン、扱白張ノ屏風ヲ以テ囲フ、但シ儉使ノ居ル方ハアケル、切腹人ハ、前帯ニ上下、無刀ニテ出ル也、短刀ハ、キツサキ四分程出テ、板ニテ挟ミ、白紙ニテ巻也

請取者心得

一、請取者ノ科ハ一樣ナルヘカラス、色々可有、何レ其科ニ依テ、先ヨリ縄付ニテ渡サス、請取ニ出スレハ縄ヲ解テ渡ス故、其心得アルヘシ、大切に、是ハ人ヲ扱ンテ被仰付事ナレハ、難有旨御請申上ル、其節、可申置事アリ、万一自分仕損ス間敷ニアラス、今一人別人被仰付被下度候ト申テ、自分仕損タラハ其人ニ請取セン為也、タトエ自分危トモ、助太刀等不可有ト堅ク申置也

(奥書)

右、福井県遠敷郡雲浜村西津、山田祐所藏、若狭事歴類合ノ内  
大正五年十一月贍写